

おおさか  
KEY  
わーど  
第30回



写真：前田勇  
「浪花しゃれことば」



こんな文章、**黒犬のおいど**、**やったら堪忍**

—表紙のことわざの戯画もどうぞ

船場の古美術商に「夏のハマグリ」を知ってはりますか」と聞かれた。

そのころはいかに？

「夏は暑いのでハマグリをほっておくと身が腐る。しかし貝殻は腐らない。“夏のハマグリ”とは身腐って貝腐らん、つまり見くさって買いくさらんという冷やかしの客を指すしゃれ言葉ですわ。

同じハマグリでも、江戸っ子の“その手は桑名の焼きハマグリ”と感性が違いますやろ。大阪のしゃれ言葉は、由緒ある商売のまちやからこそ発達したもので、身を削る厳しい商談でも、一言で人間関係を和ませます。最近の大阪は“赤児の行水”一盥で泣いてる（金が足らなくて泣いてる）人も多くてギスギスしていますが、天下の台所やった大阪らしいところのゆとりを失ったらあさまへんで…」という話になった。

他にもこんな言葉がある。「うどん屋の釜」で湯うばっかり（言うばっかり）、「竹屋の火事」でポンポン言う、「やもめの行水」で勝手に湯うとれ（言うとれ）、「安物のお稲荷さん」で鳥居（取り柄）がない、「妹の嫁入り」で姉（ねえ）と相談つまり値と相談、「うどん屋の鯉」でダシ（出し）ぬかれた、「幽霊のお手討」で死骸（仕甲斐）がない、「猿のしょん便」で木（気）にかかるなどなど。「牛のおいど」でモウの尻（もの知り）、「黒犬のおいど」で尾も白くない（面白くない）などもある（「おいど」とは大阪の言葉で臀部の意味）。

しゃれ言葉の豊富さは大阪の誇りであり、前田勇『浪花しゃれことば』（むさし書房、昭和30年）、牧村史陽編『大阪ことば事典』（講談社、昭和54年）など、碩学

も真面目にそれを論じた。

私が小学生の時分、うちの親父はよく「高野山に行ってくるわ」と言って走っていた。高野山といっても弘法大師が開かれた金剛峯寺ではない。「トイレの神様」という歌が流行ったのでお許し願いたいが便所のことである。トイレを意味する「かわや」の音が高野に転じたともいうし、落語には谷底に落とす天然の水洗便所が出てくる小咄「高野雪隠」がある。高野山で僧籍にはいり剃髪するので、高野で髪を落とす…紙をおとす…という説も捨てがたい。

さて今回、こんな展開では表紙にする面白い写真がないと心配しましたが、“雪隠の火事”で、しゃれ言葉とは逆に文字をそのまま何の解釈もせずに絵にした滑稽な作品を紹介しましょう。

幕末の大坂で刊行された「諺 臍の宿替」である。表紙の「人を茶にする」は、人間ティーパックを描いて言葉そのまま。「三味線に喰われる太夫」は、脇役が主役を食うという意味だが、字句どおり絵にすると頭が三味線になった怪人が太夫にかぶりつく図となる。文章もふるって、「ふし」がない下手くそな太夫を、節のないネギ（葱）に見たて、三味線が葱太夫」を食べると小便が臭くなるとぼやいている。

しゃれ言葉はひねりの笑い。こちらは字句通りに真っ直ぐ解釈して笑いの別天地にワープするタイプ。五百近いことわざがこの調子で絵画化されている。しかし、なんにしても昔から大阪人は尻やらトイレやら下ネタが大好きやったんですな。“赤子のしょん便”なこと—ややこ（赤子）シィことです。